清泉女子大学人文科学研究所紀要 第36号 2015年3月

# 『正法華経』「薬王如来品」について
## ――竺法護編入説の検討を中心に――

前 川 健 一

**要旨** 竺法護訳『正法華経』「薬王如来品」第十は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「法師品」第十、梵本第十章Dharmabhāṇaka-parivartaに相当する。しかし、「薬王如来品」という題名が示唆するように、『妙法華』や梵本には見られない薬王如来にまつわる本生譚が前半にあり、その後に『妙法華』・梵本と共通する法師についての教説が述べられている。この薬王如来についての説話は、維摩経に見られるものと全く同一であり、従来は、竺法護が漢訳に際して挿入したものと考えられてきた。しかし、このような想定は、「薬王如来品」という品題や、「薬王如来品」の導入部分や結びの部分、また『正法華経』にのみ見られる偈における法華経の一乗思想への言及とは背馳する。『正法華経』の中では、この薬王如来の本生譚は前後の部分と緊密な関係にあり、漢訳時に挿入されたようには見えない。もともとは薬王如来にまつわる本生譚が、法師品の位置にあったが、後に、その名にヒントを得た薬王菩薩に対する説法として法師に関する教説が挿入され、さらにその後、この挿入部分の方が前面に出て、薬王如来にまつわる本生譚が削除されるに至ったのではないかと考えられる。薬王如来本生譚が維摩経と共通している理由として、薬王如来本生譚を主題とする経典が独立に存在していて、そこから法華経・維摩経が独立に引用したという可能性もある。しかし、薬王如来本生譚を含む維摩経の法供養品には、法門受持の功徳と仏塔供養の功徳を比較して、前者を重視するという、法華経と共通の思想が見いだされることから、法華経と維摩経の間には思想的関連があると考えられる。これは、両者の影響関係を推定する近年の学説を支持するものである。

**キーワード**：正法華経、維摩経、薬王如来

## On “Yaowang rulai pin (薬王如来品)” of the *Zhengfahua jing* (正法華経): Did Dharmarakṣa Insert the Story of the Previous Life of Bhaiṣajyarāja Tathāgata into the *Lotus Sutra*?

**MAEGAWA Ken’ichi**

**Abstract** “Yaowang rulai pin (薬王如来品, Bhaiṣajyarāja Tathāgata)” of the *Zhengfahua jing* (正法華経), Dharmarakṣa’s translation of the *Lotus Sutra*, corresponds to the “Fashi pin (法師品, Dharmabhāṇaka)” of Kumārajīva’s *Miaofa*

*lianhua jing* (妙法蓮華経) and the "Dharmabhāṇaka-parivarta" of the *Saddharmapuṇḍrīka*, a Sanskrit text of the *Lotus Sutra*. The latter half of "Yaowang rulai pin" has the same content as the other two texts. But, as the title itself suggests, the former half of that chapter contains the story of the previous life of Bhaiṣajyarāja Tathāgata, which is not found in the other two texts but is in the *Vimalakīrti-nirdeśa*. It has been supposed that the story of Bhaiṣajyarāja Tathāgata in the *Zhengfahua jing* was inserted by Dharmarakṣa from the *Vimalakīrti-nirdeśa*. But this hypothesis is inconsistent with the title itself, "Yaowang rulai pin," that does not mention dharmabhāṇakas and with some parts of the "Yaowang rulai pin" which directly refer to the single vehicle (eka-yāna) theory of the *Lotus Sutra*. In *Zhengfahua jing*, the story of Bhaiṣajyarāja Tathāgata is very fitting to the context, which does not seem to be inserted later. We suppose that in the prototype of the *Lotus Sutra* the story of Bhaiṣajyarāja Tathāgata was told in the place of "Dharmabhāṇaka-parivarta," but later the teachings about dharmabhāṇakas were added to this story, and only this added part was left, when the title of the chapter was changed to the present one. We cannot deny the possibility that the *Lotus Sutra* and the *Vimalakīrti-nirdeśa* independently adopted the story of Bhaiṣajyarāja Tathāgata from some other sutra(s) concerning that Buddha. But we find similar ideas between the *Lotus Sutra* and the former half of "Nigamanaparīndanā-parivarta" of the *Vimalakīrti-nirdeśa* that tells the story of Bhaiṣajyarāja Tathāgata. So there seems some relationship between the two sutras, which supports a recent hypothesis concerning such influences from one to another.

***Keywords*:** *Zhengfahua jing*, *Vimalakīrti-nirdeśa*, Bhaiṣajyarāja Tathāgata

## はじめに

法華経[1]は、西暦紀元前後にインドで起こった初期大乗仏教の代表的な経典の一つであり、特に東アジアにおいて広く信仰を集めてきた。古来、鳩摩羅什による漢訳『妙法蓮華経』にもとづき、多くの注釈が作成され、天台宗・日蓮宗・法相宗をはじめ多くの宗派で様々な解釈が行われてきた。近代に入ると、サンスクリット原典（梵本）の発見にともない、近代仏教学の手法にもとづく研究が蓄積されてきた。特にその成立論については大きな関心を呼び、様々な説が提唱されている[2]。法華経がそもそも何を説いているのかを正確に読み取ることは、インド仏教だけでなく、東アジア仏教の展開や特色を考える上でも重要な課題と言えよう。

既に述べたように東アジアではもっぱら鳩摩羅什による漢訳『妙法蓮華経』が広く読まれ、『妙法蓮華経』に先行する竺法護訳『正法華経』は閑却されが

ちであった。近代の研究においても、漢訳としては『妙法蓮華経』のみが参照される傾向があり、『正法華経』『妙法蓮華経』・梵本の異同を全体として考察することは十分なされているとは言えない。本稿では、以上のような問題関心から、この三者の間の異同が大きい箇所の一つを取り上げ、検討するものである。

## 1　問題の所在

竺法護訳『正法華経』「薬王如来品」第十は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「法師品」第十、梵本*Saddharma-puṇḍarīka*第十章“Dharmabhāṇaka-parivarta”に相当する。しかし、「薬王如来品」という題名が示唆するように、『妙法華』や梵本には見られない薬王如来にまつわる本生譚が前半にあり、その後に『妙法華』・梵本と共通する法師（dharmabhāṇaka）についての教説が述べられている。この薬王如来についての説話は、維摩経に見られるものと全く同一であり、従来は、竺法護が漢訳に際して挿入したものと考えられてきた。しかし、『正法華経』を詳細に検討してみると、そのような想定は決定的なものとは言えない。本稿では、『正法華経』「薬王如来品」の内容と位置付けについて、法華経成立論も視野に入れて、検討を加えてみたい。

## 2　『正法華経』「薬王如来品」の内容

『正法華経』「薬王如来品」の前半には、既に述べたように薬王如来にまつわる本生譚が述べられるが、それに先だって、以下のような導入部がある。

> 仏告諸比丘。「道法一等、無有二乗。謂無上正真道。往古来今、無有両正。猶如衆流四瀆帰海合為一味。如日所照靡不周遍未曽増減。若族姓子欲至正覚解無三塗去来今者、当学受持正法花経分別空慧無六度想。不以花香伎楽供養為供養也。当了三脱至三達智無極之慧乃為供養。（大正9.99a28–99b05）[3)]

この導入部の前半では、それまでに説かれた一乗思想について略説し、後半では「花香伎楽供養」ではなく、法華経を受持し、般若波羅蜜（「無極之慧」）を供養とすべきである、と述べている。この後に「所以者何」とあり、供養の在り方を示すものとして、薬王如来についての説話が語られることになる。その概略を示すと以下のようになる。

はるか昔に、薬王如来という仏がいた。その時、宝蓋という転輪王がいた。宝蓋は五劫にわたって薬王如来に仕え、その後の五劫、宝蓋の千人の子が薬王如来に仕えた。その中に善蓋という一人の王子がいて、神から「法の供養が最もすぐれている」と告げられた。善蓋は、薬王如来のもとに行って、「法の供養」とは何かを訊ねた。如来は説法し、「あなたは、後の世に法城を守護するであろう」と予言した。善蓋は出家し、宝蓋如来の教えを説いた。この千人の子たちは、賢劫の千仏であり、善蓋とは釈尊である。

この後、次のような結びの言葉があり、偈によって散文の内容が繰り返される。

> 是故、当知、一切所供無過法養。去來今仏皆従是出。若族姓子族姓女欲得供養十方諸仏、即当受持正法花経、持諷誦読宣示一切、分別一乗無有三乗道。（大正9.0100a06–10）

## 3　維摩経における薬王如来説話

以上述べた薬王如来にまつわる本生譚は、維摩経各本に全く同じものが見られる。各本での所在は以下のとおり。

> 支謙訳『維摩詰経』「法供養品」第十三
> 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』「法供養品」第十三
> 玄奘訳『説無垢称経』「法供養品」第十三
> 梵本*Vimalakīrti-nirdeśa*第十二章“Nigamanaparīndanā-parivarta”前半

本生譚の冒頭部分を比較してみると、以下のようになる。

> （正法華）乃昔久遠劫難称限。爾時有仏、号薬王如来至真等正覚明行成為善逝世間解無上士道法御天人師為仏衆祐。世界名大浄。劫曰浄除。薬王如来寿二十中劫。諸声聞衆三十六億。菩薩大士有十二億。（大正9.0099b05–10）
> （支謙訳）有昔過去無央數劫不可称計。時世有仏、名俾沙闍羅耶〈漢言薬王〉如来至真等正覚明行成為善逝世間解無上士道法御天人師号仏世尊。其世界名太清。劫曰浄除。彼時、天帝、薬王如来寿三十劫。其弟子衆凡三十六億竝。菩薩十二億。（大正14.0535c09–14。「薬王如来寿三十劫」の「三」は「二」の誤りであろう）

（鳩摩羅什訳）仏告天帝。「過去無量阿僧祇劫時世有仏、号曰薬王如来応供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊。世界名大荘厳。劫曰荘厳。仏寿二十小劫。其声聞僧三十六億那由他。菩薩僧有十二億」。（大正14.0556b02–06）
（玄奘訳）爾時、世尊告天帝釈。「乃往過去不可思議不可称量無数大劫有仏出世。名曰薬王如来応正等覚明行円満善逝世間解無上丈夫調御士天人師仏世尊。彼仏世界名曰大厳。劫名厳浄。薬王如来寿量住世二十中劫。其声聞僧有三十六倶胝那庾多數。其菩薩衆十二倶胝。（大正14.0586a28–b05）

宝蓋王の子について、『正法華経』は「善蓋」、支謙訳は「善宿」、鳩摩羅什訳・玄奘訳は「月蓋」、梵本はSomacatraとする。また、宝蓋王の後身である仏について、『正法華経』は「宝焔」、支謙訳は「宝成」、鳩摩羅什訳は「宝炎」、玄奘訳は「宝焔」、梵本はRatnārciとしている。これらによって、『正法華経』が先行する支謙訳を改変したものではなく、独自に翻訳したものであることが分かる。

特に、薬王如来が法の供養について教示する内容については、『正法華経』は鳩摩羅什訳の方に近く、支謙訳との隔たりが大きい。

（正法華経）無我、無人、非寿、非命。志空無願無想之法。不由衆行。処于道場而転法輪。勧諸天龍揵沓和等。莫不楽仰。開闡法蔵、護諸賢聖。宣揚顕布諸菩薩行。究竟衆苦、無我、非身。群生違禁、立以所便。衆魔異道、堕顛倒見、貪猗有為、常懐怖懅。而為諮嗟諸仏之徳、使滅生死慰除所患、而見安隠無為之事。去来今仏所歎如是。而割判了微妙色像。総持崖底諸法法忍。開道宣布、闡発諸器。権便所義、将養正法。是為法之供養。（大正9.0099c01–11）
（支謙訳）非人、非命、非女、非男。如空無相無願無為。道地之行法輪之際、天人百千所共歎誉。法蔵多度含受衆人。明宣諸仏菩薩道行。為入有義法之正要。下於無常苦空非身。戒無所犯。一切彼転見為怖畏。師仰諸仏。覩夫生死而不与同現滅度安。習如是像衆経微言。分別惟観而以受法。是爲法之供養。（大正14.0536a02–09）
（鳩摩羅什訳）無我、無人、無衆生、無寿命。空無相無作無起。能令衆生坐於道場而転法輪。諸天龍神乾闥婆等所共歎誉。能令衆生入仏法蔵、摂諸賢聖一切智慧。説衆菩薩所行之道。依於諸法実相之義。明宣無常苦空無我寂滅之法。能救一切毀禁衆生。諸魔外道及貪著者能使怖畏。諸佛

> 賢聖所共称歎。背生死苦、示涅槃楽。十方三世諸仏所説。若聞如是等経、信解受持讀誦、以方便力為諸衆生分別解説顕示分明。守護法故。是名法之供養。（大正14.0556b25–c06）

維摩経では、この本生譚の前に帝釈天と釈尊との会話があり、帝釈天がそれまでに説かれた不可思議解脱を修する者を供養・守護することを述べ、それを受けて釈尊が法による供養について語り、その具体例として薬王如来にまつわる本生譚が語られることになる。それまでの内容の要約があった後、法による供養の話へと転ずるという展開も、「薬王如来品」と酷似している。なお、『正法華経』「薬王如来品」にある偈は、維摩経各本には見えない。

## 4　従来説の検討

『正法華経』「薬王如来品」についての先行研究としては、河野訓「『正法華経』薬王如来品と『維摩経』法供養品について」[4] がある。河野説では、竺法護が漢訳に際し、補入したものという立場から、以下のように論じている。

①『出三蔵記集』『開元録』には、竺法護が維摩経を翻訳したことが記されている。
②竺法護が『正法華経』「薬王如来品」で挿入した箇所は、先行する支謙訳『維摩詰経』の訳文とは異なっており、竺法護自身が訳した維摩経から採られた可能性が高い。
③竺法護が、維摩経から挿入した意図は、法華経の前半部分に対する流通分として、「法供養が普遍性を持つものであることを『維摩経』法供養品を借用して述べたうえで、その中でも『正法華経』がひときわ優れたものであり、重要視されるべき経典であるという論理」にもとづいている。
④『出三蔵記集』には、竺法護訳維摩経について「刪維摩詰經一卷〈祐意謂、先出維摩煩重、護刪出逸偈也〉」（大正55.0008c16）とあり、「逸偈を訳出した」ことが知られるので、偈も含めて『正法華経』に挿入したと考えられる。

しかし、『正法華経』そのものを注意深く読むと、以上のような想定では十分に説明できない点が出てくる。

まず、大きな問題は「薬王如来品」という品題である。薬王如来にまつわる本生譚が、竺法護の挿入であるとすると、竺法護は挿入にあたってわざわざ品題まで変えてしまったということになる。漢訳経典において、品題が、訳者に

よって異なったり、梵本と一致しなかったりということはありうるが、自ら挿入した部分に合わせて品題を変更するというのは、考えにくいように思われる。

既に述べたように、「薬王如来品」には、維摩経と共通する部分の他に、法華経の一乗思想を前提とした導入部分や結びの部分があるが、河野説のような想定を行う場合、これは竺法護が自分で書いたものということになるのであろうか。

また、偈についても、「仮使有人　欲供養者　当受持此　正法華経　分別如来　善権方便　無有二乗　皆帰一道」（大正9.0100b11–13）という法華経の内容を前提とした部分がある。たとえ竺法護の訳した維摩経には他本にない「逸偈」が訳出されていたとしても、今引いた部分は維摩経から引かれたものとは考えることはできず、これまた竺法護が自ら作成したものと考えることになるのであろうか。

つまり、河野説のような想定に立つと、竺法護は、わざわざ品題を変え、自分で散文や偈を作成してまで、薬王如来にかかわる本生譚を挿入したということになるが、法華経そのものの中には、法華経受持の果報を強調した箇所は枚挙にいとまがないのだから、そこまでして挿入する必要があるのか、疑問に感じざるを得ない。

なお、竺法護訳『刪維摩詰經』一巻の内容については、「祐意謂」とあるように、『出三蔵記集』編者である僧祐の意見に過ぎず、確実なものとは言えない。しかも、支謙訳が二巻であるのに対して、竺法護訳は一巻であり、かなり省略がなされていると考えられ、他本にない「逸偈」が訳されているとは考えにくい。「逸偈」は、「偈を逸す」（偈を外した）と解すべきではなかろうか。そう解釈した方が、支謙訳が二巻であるのに対して、竺法護訳が一巻であることの説明にもなり穏当ではないかと思われる。

以上の検討からすると、竺法護が、漢訳に際して、維摩経から薬王如来にかかわる本生譚を挿入したという想定は、十分な説得力を持つものとは言えない。そこで視点を変えて、竺法護が訳出に使用した法華経原典には、もともと薬王如来にかかわる本生譚があったと考え、その立場からこの問題を検討してみたい。

## 5　『正法華経』の中での「薬王如来品」の位置付け

まず確認しておきたいのは、維摩経との関係であるが、先にも触れたように維摩経の中でも薬王如来にかかわる本生譚は必ずしも他の部分と緊密な関係にあるわけではない（この部分には、釈尊本人を除けば、主人公である維摩詰を

はじめ、それまでの主要登場人物が一切登場しない)。法供養を説く『薬王如来経』といった単行経典があり、維摩経・法華経がそれぞれ独立にそれを編入したという可能性も考えられる。『正法華経』の方では偈があるので、法華経の記述を維摩経が（偈を削除した上で）流用したという可能性もあるが、ここではこれ以上は立ち入らない。

ここで論じたいのは、『正法華経』の中では、この「薬王如来品」は前後の部分と緊密な関係にあり、漢訳時に挿入されたようには見えないという点である。

『妙法華』や梵本の「法師品」では、直前の「授学無学人記品」までの内容とは無関係に、薬王菩薩をはじめとする菩薩たちに対して説法が行われるが、『正法華経』「薬王如来品」では、先に見たように一乗思想について触れられ、それ以前の内容と連続性がたもたれている。

一方、後続する宝塔品に対してはどうであろうか。『正法華経』「七宝塔品」には、『妙法華』「宝塔品」や梵本にはない内容がある。それは『薩曇分陀利経』と共通するもので、多宝如来が釈尊の過去の布施行を称賛し、偈を説くというものである[5)]。この偈は、以下のようなものである。

設聞多宝仏　知其名業者　未曽畏終始　不復遭苦患
若聞薬王師　仮記名号者　衆病自然愈　尋則識宿命
一切所供養　奉法為最上　分別空無慧　自致得仏道
宣暢法華経　以示諸不及　解本無三乗　順一無上真
（大正9.0103a10–16）

これは『薩曇分陀利経』の「聞薬宝仏　知名字者　不畏生死　不復勤苦。聞薬王仏　知字名者　可得愈病　自識宿命」（大正9.0197a26–28。「可得愈病」は高麗蔵では「不得愈病」。宋元明三本により訂正する）に対応するが、ここで注目されるのは、「薬王師」すなわち薬王如来の名が見えることである。さらに、それに続く「一切所供養　奉法為最上」以下の偈は、先に見た「薬王如来品」に説かれる内容の要約である。もし河野説のように、竺法護が漢訳に際して薬王如来にまつわる本生譚を挿入したのだとしたら、この「七宝塔品」の偈も、それに合わせて竺法護が作成したということになるが、そこまでして薬王如来の説話を挿入したとは考えにくく、この点からも、竺法護挿入説は支持しがたい。

以上見て来たように、『正法華経』の中で見てみると、「授学無学人記品」「薬王如来品」「七宝塔品」は、一定の脈絡があることが分かる。これに対して、

むしろ異質なのは、『妙法華』「法師品」に相当する箇所である。河野説では、法師品で釈尊の説法の聴衆として登場する薬王菩薩がヒントとなって、薬王如来が導入されたと想定しているが、事実はむしろ逆ではないだろうか。すなわち、もともとは薬王如来にまつわる本生譚が、法師品の位置にあったが、後に、その名にヒントを得た薬王菩薩に対する説法として法師に関する教説が挿入され、さらにその後、この挿入部分の方が前面に出て、薬王如来にまつわる本生譚が削除されるに至ったのではなかろうか。

## 6　今後の課題

以上、本稿では、『正法華経』における薬王如来本生譚は、竺法護が翻訳時に挿入したものではなく、竺法護が訳した原本にもともと存在した可能性を述べてきた。その場合、この薬王如来本生譚が維摩経と共通していることをどのように考えればよいのであろうか。先に述べたように、薬王如来本生譚を主題とする経典が独立に存在していて、そこから法華経・維摩経が独立に引用したという可能性もあるが、以下に見るように法華経・維摩経の両者の間に関係のある可能性も否定できない。

維摩経の法供養品では、薬王如来の本生譚に入る前に、それまでの部分で説かれた教説による功徳を説く導入部分がある。その中には、法門受持の功徳と仏塔供養の功徳を比較して、前者を称賛した箇所がある。支謙訳では以下のように訳されている。

> 仏言、「善哉、善哉。天帝。吾代汝喜。是諸去来現在仏得道者、皆説是法。若是天帝欲得供養去来現在諸仏世尊、当受是法持誦自清宣示同学。正使、天帝、三千世界如来満中、譬如甘蔗竹蘆稲麻叢林、甚多無数、皆為如来。有賢者子賢者女、於一劫若百劫、敬之、事之、奉之、養之、一切施安、進諸所楽、至諸佛般泥曰、一一等意、穿地、蔵骨、立七宝塔、周於四方、弥満仏界、高至梵天、施設蓋幡、為諸仏、別造塔、皆於一劫若百劫、供養衆華衆香衆蓋幢幡伎楽。云何、天帝、此人殖福能増多不」。
> 曰、「多矣。世尊。彼之福祐不可称説億百千劫」。
> 仏告天帝、「当以知、是賢者子賢者女、受此不思議門所説法要、奉持説者、福多於彼。所以者何。法生仏道、法出諸仏。其能供養此正法者、非思欲施輩。当以知此」（大正 14.0535b21–c08）

ここでは仏が亡くなった後に、その遺骨（舎利）を埋納した巨大な仏塔を建

て、それを供養することが説かれているが、維摩経の中で仏塔の建立や供養について言及されているのは、この箇所のみである。先に述べたように、薬王如来の本生譚を含む箇所が、維摩経の前後と必ずしも必然的な連関を有していないことからすると、この仏塔に関する記述も、維摩経の成立においては最末期の付加的部分である可能性がある。

一方、法華経の方には、仏塔についての言及が頻出するが、『妙法華』・梵本の法師品（『正法華』「薬王如来品」後半部分）には、法華経が流布した地に建立される塔には、仏の遺骨を安置する必要がないことが説かれる。これは、先に引いた維摩経の文と趣旨を同じくしており、遺骨を埋納した仏塔への供養よりも、教説や経典への供養の方に、より多くの功徳を認めるという立場を表明している。『正法華』では以下のように訳されている。

> 仏告薬王菩薩、「若有能説斯経訓者書写見者、則於其人起仏神寺。以大宝立、高広長大。不当復著仏舎利也。所以者何。則為全著如来舎利。其有説此経法之処、諷誦歌詠書写、書写已竟、竹帛経巻、当供養事。如仏塔寺、帰命作礼、一切香華雑香芬薫、琴瑟箜篌幢蓋繒幡。若有衆生欲得仏寺稽首作礼者、当親近斯経無上道教」。（大正9.0101b18–26）

一方、「薬王」の名が共通する薬王菩薩の本生譚を説く法華経の薬王菩薩本事品でも、仏塔への供養と法門受持が対比されている。『正法華』「薬王菩薩品」では以下のように訳されている。

> 又、族姓子、菩薩勤苦不可称計。捐身、棄命、無有限量。常建大乗、志無上道、興発大功無極之徳。於如来前、然一足指、功徳難喩。況然其身以為供養。勝施国土妻子血肉。設以珍宝満仏世界、布施供養諸仏聖衆、福徳雖多、不及於彼。所以者何。福報有尽、無益衆生。若族姓子族姓女、受正法華一四句頌、分別奉行、為人解説、比其福施、万不如一。（大正9.0126a22–b01）

薬王菩薩本事品では、薬王菩薩が仏塔の前に自らの腕を燃やして供養したことが説かれるが、上掲の箇所では焼身供養の功徳を称賛した上で、法華経の「一四句頌」を受持することが、それ以上の善行であることが示されている。

これらは、維摩経の法供養品と法華経との間に何らかの関係があることを示唆しているように思われる。平岡聡『法華経成立の新研究：仏伝として法華経を読み解く』（東京・大蔵出版、2012年）では、登場する仏弟子の比較などを

通して、法華経と維摩経に影響関係がある可能性を示唆している。本稿での考察も、その仮説を支持するものと言える。

本稿のような立場を取る場合、『妙法華』や梵本（およびチベット訳）に薬王菩薩本生譚が見えない理由をどのように考えるかは大きな問題であるが、これについては法華経全体の成立過程を検討する必要があり、今後の課題としたい。

## 注

1） 以下、法華経・維摩経など、『　』を付さない表記は、特定の本文を有する各本ではなく、それぞれの経典そのものを指す。
2） 伊藤瑞叡『法華経成立論史:法華経成立の基礎的研究』（京都:平楽寺書店、2008年）参照。
3）『大正新脩大蔵経』よりの引用は「大正」と略記する。
4）『印度学仏教学研究』46–1、1997年。河野『初期漢訳仏典の研究：竺法護訳を中心として』（伊勢・皇學館大学出版部、2011年）120～143頁に増補・編入。
5） 前川健一「『薩曇分陀利経』と法華経」（『仏教学』56号、2015年近刊）参照。